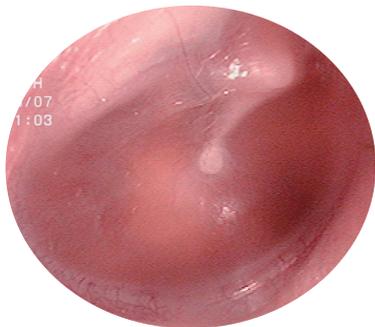


小児の難聴の原因として最も多い「滲出性中耳炎」という病気をご存じでしょうか。この病気では、鼓膜の奥に液体がたまりますが【図1】、難聴以外の症状が無いため気づかれないことも多く(9割の人が1回はかかるといわれますが記憶に無い方も多はずです)、放置すると難聴による言語や学習への影響、将来より重度の中耳炎へと進展することがあります。小児は自分で難聴を訴えられないため、聞き返しが多い、テレビの音が大きいなどの症状がないか周りの大人が気づいてあげることが重要です。また、最近では生後すぐに聴力検査(新生児聴覚スクリーニング)を行い、難聴の診断が早期に行えるようになってきており、当院も二次聴力検査機関に指

定されています。しかし、より高度の難聴がある小児では、難聴を診断し聞こえるようにすれば良いという訳ではなく、言語の獲得や学習への対処などの適切な療育が求められるものの、療育は各県によって異なり標準的な指標はありませんでした。

そこで、前職の長崎大学では、これらに対するガイドラインを作成や【図2】、県内のお子さんに対する事業の立ち上げを行って来ました【図3】。当院でも必要な環境を整えて頂けるようでしたら、引き続き難聴への対処を続けていきたいと考えております。また、耳科手術指導医に加えて鼻科手術指導医の取得も目指しておりますので、耳鼻咽喉科領域の症例がございましたらいつでもご相談下さい。



【図1】



【図2】



【図3】